

赤い船

小川未明

青空文庫

露子は、貧しい家に生まれました。村の小学校へ上がったとき、オルガンの音を聞いて、世の中には、こんない音のするものがあるかと驚きました。それ以前には、こんない音を聞いたことがなかったのです。

露子は、生まれつき音楽が好きとみえまして、先生が鳴らしなざるオルガンの音を聞きますと、身がふるいたつように思いました。そして、こんない音のする器械は、だれが発明して、どこの国から、はじめてきたのだろうかと考えました。

ある日、露子は、先生に向かつて、オルガンはどここの国からきたのでしょうか、と問いました。すると先生は、そのはじめは、外国からきたのだといわれました。外国というと、どこでしようかと考えながら聞きますと、あの広い広い太平洋の波を越えて、そのあちらにある国からきたのだと先生はいわれました。

そのとき、露子は、いうにいわれぬ懐かしい、遠い感じがしまして、このいい音のするオルガンは船に乗ってきたのかと思ひました。それからというもの、なんとなく、オルガンの音を聞きますと、広い、広い海のかなたの外国を考えただけであります。なんでも、いろいろと先生に聞いてみると、その国は、もつ

とも開けて、このほかにもいい音のする楽器がたくさんあつて、
 その国にはまた、よくその楽器を鳴らす、美しい人がいるという
 ことである。で、露子は、そんな国へいつてみたいものだ。どん
 なに開けている美しい国であろうか。どんなに美しい人のいると
 ころであろうか。そしてその国にいくと、いたるところでいい音
 樂が聞かれるのだと思いました。それで露子は大きくなったら、
 できるものなら、外国へいつて音楽を習つてきたいと思いま
 した。露子の家は貧しかったものですから、いろいろ子細あつて、
 露子が十一のとき、村を出て、東京のある家へまいることにな
 りました。

二一

その家はりっぱな家で、オルガンのほかにピアノや蓄音機などがありました。露子は、なにを見ても、まだ名まえすら知らない珍しいものばかりでありました。そしてそのピアノの音を聞いたり、蓄音機に入っている西洋の歌の節など聞きましたとき、これらのものも海を越えて、遠い遠いあちらの国からきたのだろうかと考えたのであります。昔、村の小学校時代にオルガンを見て、懐かしく思ったように、やはり懐かしい、遠い、感じがしたのであります。

その家には、ちょうど露子の姉さんに当たるくらいのお方があ

りまして、よく露子つゆこをあわれみ、かわいがられましたから、露子つゆこは真しんの姉ねえさんとも思おもつて、つねにお姉ねえさま、お姉ねえさまといつて懐なつきました。

よく露子つゆこは、お姉ねえさまにつれられて、銀座ぎんざの街まちを歩あるきました。そして、そのとき、美うつくしい店みせの前まえに立たつて、ガラズ張ばりの中なかに幾いくつも並ならんでいるオルガンや、ピアノや、マンドリンなどを見みましたとき、

「お姉ねえさま、この樂器がっきは、みんな外がい国こくからきましたのですか。」と問といました。お姉ねえさまは、

「ああ、日にっ本ぽんでできたのもあるのよ。」
といわれました。

露子の目には、それらの楽器は黙っているのですが、ひとつひとつ、いい、奇しい妙な、音色をたてて、震えているように見えたのであります。そして、晩方など、入り日の紅くさしこむ窓の下で、お姉さまがピアノをお弾きなさるとき、露子は、じつとそのそばにたたずんで、いちいち手の動くのから、日の光がピアノに当たって反射しているのから、なにからなにまで見落とすことがなく、また歌いなされる声や、かすかにふるえる音のひとつひとつまで聞きのことになかったのであります。

露子にはピアノの音が、大海原を渡る風の音と聞こえたり、岸边に打ち寄せる波の音と聞こえたのであります。そして、ピアノをお弾きなさるお姉さまが、すきとおるお声で、外国の歌を

うたいなきるお姿すがたは、いつもよりかいつそう神々こうごうしく見えたのであります。水すい晶しようのようなお目めは星ほしのごとく輝かがやいて、涙なみだが浮

かんでいたのであります。

露つゆこ子は、自分じぶんの母かあさまや、父とうさまのことを思い出し、また村むらの小学しょうがっこう校がっこうのことなどを思い出おもして、いつしか熱あつい涙なみだが、ほおを流ながれたのであります。

三

露つゆこ子は、おりおり、自分じぶんが船ふねに乗のって外がいこく国こくへいったような夢ゆめを見みました。そして、外がいこく国こくでオルガンを習ならったり、ピアノを聞き

いたりして、たいそう自分じぶんが音楽おんがくが上手じょうずになつて、人々ひとびとからほめられたような夢ゆめを見ておおいに喜ぶよろこと、夢ゆめがさめて驚いたおどろことがありました。

* * * * *

初夏はつなつのある日ひのこと、露子つゆこは、お姉さまねえといつしよに海辺うみべへ遊びあそびにまいりました。その日ひは風かぜもなく、波なみも穏おだやかな日ひであつたから、沖おきのかなたはかすんで、はるばると地平線ちへいせんが茫然ぼんやりと夢ゆめのようになつて見みえました。白しろい雲くもが浮うかんでいるのが、島しまか影げのようにも、飛とんでいる鳥影とりかげのようにも見みえたのであります。

お姉さまねえは、いい声こえでうたいながら、露子つゆこの手てをとつてお歩きあるき

になりますと、露子も、きれいな砂を踏んで波打ちぎわを歩きました。波は、かわいらしい声をたてて笑った。このとき、沖のはるかに、赤い筋の入った一その大きな汽船が、波を上げて通り過ぎるのが見えました。露子は、ふと、この汽船は遠くの遠くへいくのではないかと思つて見ていますと、お姉さまも、またじつとその船をごらんになりました。

「お姉さま、この海はなんとという海なのでしよう。」
と聞くと、「この海が太平洋という海なのですよ。」とお教えくださいましたので、この海をどこまでもいけば外国へいかれるのだらうと思ひました。

「あの、赤い船は外国へいくのでしようか。」

と、露子はお姉さまに問いました。するとお姉さまは、いつもじつとものをごろんになるとき目に涙を浮かべられますが、やはり目に涙をたたえて、

「そうねえ。」

といつて、暫時、頭をおかしげになつていましたが、

「ああ、きつと外国へいくんでしようよ。」

と、やさしくいわれました。

「幾日ばかりかからなければ、外国へいかれませんの。」

と、露子は聞きました。

「幾日も、幾日もかからなければ、外国へはいかれません。幾千マイルという遠くへいくんですもの。」

と、お姉さまはいわれました。

そう思うと、なんとなくあの赤い船が懐かしいのであります。

あの赤い船は太平洋を渡つて、美しい国へいくのかと思ひます

と、あの赤い船にどんな人が乗つていて、なにをしているかと思ひます

えました。けれど遠くへだたつていますので、ただ赤い筋と、ひ

らひらひるがえつてゐる旗と、太い煙突と、その煙突から上

る黒い煙と、高い三本のほぼしらが見えたばかりであります。

そして船の過ぎる跡には白い波があわだつてゐるばかりでありま

した。

露子は、どうしてもその赤い船の姿を忘れることができませぬ。

自分も、その船に乗つて外国へいつてみたい。そして、オルガ

ンやピアノや、いい音楽を聞いたり、習ったりしたいものだ
 考かんえがました。見みるうちに赤あかい船ふねは、だんだん遠とざおかつてしまつた。
 日ひは漸だんだん々にし西かたむに傾かたむいて、波なみの上うえが黄こが金ね色いろに輝かがいて、あちらの岩い
 わわかかげ影かげが赤あかく光ひかつた時じ分ぶんには、もうその船ふねの姿すがたは波なみの中うちに隠かくれて、
 煙けむりが一ひと筋すじ、空そらに残のこつていたばかりです。
 その日ひは、お姉ねえさまといっしよに海うみ辺べで遊あそび暮くらして、疲つかれた
 足あしをひきずつて家うちに帰かえりました。

四

明あくる日ひ、露つゆ子こは窓まどによつて、赤あかい船ふねはいまごろどこを航こう海かい

していようかと思つていますと、ちようどそこへ一羽のつばめが、どこからともなく飛んできました。

露子は、つばめに向かつて、

「おまえは、どこからきたの。」

と聞きますと、つばめは、かわいらしいくびをかしげて、露子を

じつと見ていましたが、

「私は、南の方の海を渡つて、はるばると飛んできました。」

と答えました。

「そんなら、太平洋を越えてきたの？」

と、露子の顔には覚えが笑みがあふれたのであります。つばめは、

「それは幾日となく、太平洋の波の上を飛んできました。」

と答えました。

「そんなら、おまえは船を見なくて？ ……」
と、露子は聞きました。

すると、つばめは、

「それは、毎日毎日、毎日幾そうとなく船を見ました。あなたのお聞きになります船は、どんな船ですか。」

と問い返しました。

露子はつばめに、その船は赤い筋の入った船で、三本の高いほばしがあることから、自分の見た記憶のままを、いちいち語り聞かせたのであります。

すると、つばめは、まったくびをかしげて、この話を聞いていま

したが、
 「その船なら、私はよく知っています。私が長い旅に疲れて、暮
 れ方、翼を休めるため、海の上に止まる船のほばしらを探してい
 ましたとき、ちようどその赤い船が、波を上げて太平洋を航
 海していましたから、さつそく、その船のほばしらに止まりま
 した。ほんとうにその晩はいいお月夜で、青い波の上が輝きわた
 って、空は昼間のよう(あか)に明るくて、静か(しず)でありました。そして、
 その赤い船の甲板では、いい音楽(おんがく)の声(こえ)がして、人々(ひとびと)が楽し
 く打ち群(む)れているのが見(み)えました。」
 と語り聞(かた)かして、つばめは、またどこへか飛(と)び去(さ)ってしまいまし
 た。

露子^{つゆこ}は、いまごろはその船^{ふね}は、どこを航海^{こうかい}しているだろうか
と^{かんが}考えながら、しばしつばめのゆくえを見守^{みまも}りました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 ㊀」講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第7刷発行

※表題は底本では、「赤《あか》い船《ふね》」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：ぷろぼの青空工作員チーム校正班

2011年11月2日作成

2012年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤い船

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>